

「家なき幼稚園」における保育者の保育内容に関する学び —保育実践者坂内ミツ著『子供の遊ばせ方』に着目して—

和田真由美

要旨

大正期に設立された「家なき幼稚園」は、園舎を持たず自然の中で保育を行い、その保育は保育経験者ではなく、女子高等学校を卒業したばかりの「若い素人の娘」たちによって行われた。本研究では、「家なき幼稚園」の「若い素人の娘」たちがどのように、保育者となるべく修養していったかに着目し、その方法のうちの1つである、「読書」の具体的な内容を明らかにした。「家なき幼稚園」の設立者である橋詰良一は、保育者らに読書を奨励し、厳選した7冊を幼稚園の実典とした。その中の1冊『子供の遊ばせ方』は、坂内ミツが東京女子高等師範学校附属幼稚園に12年勤め、そこでの保育実践による経験をもとに書かれたものであった。本研究では、『子供の遊ばせ方』の内容の把握から、「家なき幼稚園」の保育者らが、『子供の遊ばせ方』を通して、子どもと接する時の心のありかた、遊びの本質、遊びにおける具体的な環境構成や援助を学び得たことが明らかとなった。

キーワード：家なき幼稚園、坂内ミツ、保育者の研修、保育内容、大正期・昭和初期の保育

1. はじめに

自然そのものを園舎とし、自然の中での保育を行った「家なき幼稚園」は、大正期の郊外保育や園外保育を行った幼稚園として、幼児教育史において度々紹介されている¹⁾。「家なき幼稚園」は、教育者であり、社会啓蒙家でもあった橋詰良一(1871-1934)²⁾によって、1922(大正11)年5月に大阪府池田室町にて開園された。池田室町におけるこの幼稚園は「池田家なき幼稚園」と名付けられ、その後、1924(大正13)年に「宝塚家なき幼稚園」(2月)、「十三家なき幼稚園」(5月)、「箕面家なき幼稚園」(6月)、「大阪家なき幼稚園」(10月)、「雲雀丘家なき幼稚園」(12月)、さらに翌年に「千里山家なき幼稚園」(2月)と7園³⁾にまで広がった。

「家なき幼稚園」に関する研究では、上笙一郎・山崎朋子(1965)、森上史朗(1991)らによって、大正期の児童中心主義の流れに位置づけるものとして評価され、村山貞雄(1969)、宍戸健夫(1971、1994)らによって、園舎を持たない郊外の自然の中での教育実践が、野外保育・露天保育の系譜として示されてきた。また、山崎千恵子(1990)は、「家なき幼稚園」の保姆(以降、保育者とする)が中心となり活動していた団体「姉様学校」とその機関誌『愛と美』について内容の一部を紹介している。

近年の研究では、福元真由美(1999)が、時代背景とともに郊外住宅と当時の新中間層のライフスタイルの特色に着目した視点から、家なき幼稚園を読み解いている。橋川喜美代(2003)は、自然の中での教育における生活形態の確立の視点から「家なき幼稚園」を考察している。和田真由美(2011)は、「家なき幼稚園」の保育内容および保育実践の記録から、放任ではなく計画性のある保育が行われていたことを示した。米津美香(2014)は、思想史研究の視点から橋詰の「愛」と「自然」概念に着目してその思想を読み解いている⁴⁾。また、大阪毎日新聞社の事業部長を務めていた橋詰については、富田好久(1989)、津金澤聰廣(1996)らにより、社会事業分野における活動も明らかにされている⁵⁾。

論者は、前述のように、2011年に、「家なき幼稚園」に関する研究において、「家なき幼稚園」の保育内容および保育実践等の記録

を紐解き、「家なき幼稚園」における保育が自然の中で自由に子どもを遊ばせておくという放任的な保育ではなく、季節環境を生かしつつ、一定の計画性がある保育が展開されていたことを明らかにした。そこでは、幼児の主体性を尊重しつつも、保育者の教育的意図や視点が盛り込まれていたことが把握できた。しかし、「家なき幼稚園」の保育者は、幼稚園教員としての有資格者や保育経験が長い保育者ではなく、女子高等学校を卒業したばかりの「若い素人の娘」が多く採用されていた⁶⁾。「若い素人の娘」はどのようにして、教育的意図や視点をもち保育を行っていきことができたのだろうか。橋詰は、「家なき幼稚園」の理想とする保育を実践できる保育者を、独自の方法で育成していったのである。「家なき幼稚園」の研究において、保育者がどのように修養していったかを紐解くことは、「家なき幼稚園」の保育を明らかにしていくためにも必要であると考えられる。「家なき幼稚園」での保育者の修養の大枠については、拙稿にて即示している⁷⁾。本稿は、それに続くものとして、「家なき幼稚園」の保育者の具体的な保育内容に関する学びについて、坂内ミツの著書『子供の遊ばせ方』⁸⁾に着目して考察する。

研究の方法は、橋詰良一の著書である『家なき幼稚園の主張と実際』(1928)、坂内ミツ『子供の遊ばせ方』(1924)、さらには関連する著書、論文の分析により行うものとする。

なお、引用部分以外での著書名、出版社、表2については、旧漢字を新漢字に改めた。

2. 「家なき幼稚園」の保育内容

(1) 「家なき幼稚園」の1日の保育の流れ

「家なき幼稚園」では、基本的には、建物を使わず、自然の中に出かけていき保育を行った。保育者と幼児は、集合場所に集まった後、ござ、組み立て机、折りたたみ式の椅子、乳母車に取り付けたオルガンなどの用具を持ち運び、付近の森や川や野原に出かけて活動を行った。保育時間は、夏はおよそ9時から13時頃まで、冬はおよそ10時から14時頃までとし、春や秋に少し遠出するときなどは、9時から15時頃まで遊び回ることがあったようである。

保育を行うにあたっては、晴れの日と雨の日のそれぞれの1日の予定を立てた。例えば、「〇月〇日〇曜日、(晴) 廻遊 (裏のお山から瀧へ)・お辣當・おはなし/ (雨) 蓄音機・自由書⁹⁾」といったもので、晴れの日には、自然の中で予定の内容を行った。一方で、雨の場合には、集合場所のお宮などの屋根のある所で、蓄音機で音

楽を聞いたり絵を描いたりして遊び、時には合羽を着て雨の中での遊びを楽しんだ。表1は実際に行われた1日の保育の流れを記録したものである。

表1の「池田家なき幼稚園」では、お宮に集合して挨拶等を行った後、お宮の前で遊戯をして遊び、その後、野原の広場へ行き、草や花を摘んだり、かくれんぼをしたことがうかがえる。その後、お話を聞き、お弁当を食べて帰るという流れである。「箕面家なき幼稚園」でも、集合場所で集まった後、歌を歌い、遊戯を行ってから廻遊に出掛けている。ここでは、廻遊と記録されているが、「家庭めぐり」と呼ばれる、地域のお宅から招待されて、その家の庭で遊ぶという活動を行っていることが把握できる。7つの園は、それぞれ出掛けていく先の自然は、野原や丘、川辺など違いはあったが(徒歩ではなく、バスや電車で郊外の自然のある所にまで出ている園もある)、自然の中でいろいろな遊びを楽しみ、お弁当を食べてから帰っていたことが分かる。

表2は、ある1ヶ月の保育の記録であるが、表1で見られる、遊戯、唱歌、談話(お話し)のみならず、いろいろな遊びを行っていたことが把握できる。また、卒園式やお遊戯会などの行事の際は、デパートのホールを借りて行うこともあった。

(2)「家なき幼稚園」の保育項目とその内容

「家なき幼稚園」の保育は、「生活」をキーワードに、幼児と保育者が相互に関係し合い、共に生活を営んでいく形がとられた。橋詰の著書『家なき幼稚園の主張と実際』には、「保育項目の細説」として、「歌へば踊る生活」、「お話しをする生活(原文ママ)」、「遊びを共にする生活」、「廻遊にいそむ生活」、「手技を習ふ生活」、「家庭めぐり」の6つの保育の項目が示されている¹⁰⁾。

それぞれの具体的な内容を見ると、「歌へば踊る生活」では、「歌へば必ず踊つたり跳ねたりするやうになつて居る、即ち歌だけを上手に歌はせる練習をしたり、踊りだけを上手にさせるための教練をしたりはしない。たゞ歌はせながらおのづからの催しに促されての舞踊をさせますそれを楽しませ(原文ママ)ます。そのために先生も踊れば、お當番の姉えちやん母アちやんにも踊つて頂きます。」と記されており、子ども自ら、歌うと自然と楽しくなり、踊り出したくなるような保育を行うこと、そこでは保育者も子どもと共に楽しく歌い踊ることが示されている。

「お話しをする生活」では、「お話を聞かせて喜ばせることは勿論ですが、子供からお話を聞きます。互いに話し合ひ聞きあつて共に楽しむ生活を営むのですが、話術といふやうなことを先生に望まず、どんな初任の人でも出来る方法によつて感情を交換して貰ひます。話されなければお伽話の

表1 ある1日の保育

◇池田家なき幼稚園	
禮拜(お宮様で)	九時
お遊戯	九時十分—九時三十分
廻遊 野原の広場へ	十時—草、花つみ、かくれんぼ
談話	十一時—十一時二十分
おべんとう	片付けて帰る仕度
歸園	一時
◇箕面家なき幼稚園	
自由にお遊び	子供がほゞ揃ふまで
朝のお唱歌及び遊戯	九時三十分—十時
廻遊(岸本様の別荘へ)	十時—十時三十五分
お遊び	十時三十五分—十一時
お話し(拇指小僧)	十一時—十一時十五分
お遊び	十一時十五分—十一時三十分
お辯當	十一時三十分—十二時
お遊び	十二時—十二時三十分
鶏鳩や鶯を訪れながらお歸り	十二時三十五分頃から歸途解散

出典：橋詰良一『家なき幼稚園の主張と実際』東洋図書、1928、pp.155-156

表2 「池田家なき幼稚園」昭和2年2月の保育の記録

合計	板跳	バスケットボール	椅子取り	書き方	シヤボン玉	綱引き	ハンカチ落とし	英語(ラレキサ)	蓄音機	メンタルテスト	おはなし	廻遊	手技	まりまわし	自由遊び	遊戯唱歌	昭和二年二月分	
2.55													0.20	0.30	1.30	時分 0.35	晴	日 1
3.40												2.30			0.30	0.40	晴	2
2.20										0.40					1.40		晴	3
1.55									0.25	0.25					0.25	0.40	晴	4
3.10							0.35	0.20							1.30	0.45	曇雪	5
2.20						0.20									1.20	0.40	晴	6
3.10									0.30			2.00				0.40	晴	8
3.05												1.30	0.15		1.00	0.20	晴	9
3.00					0.10		0.40		0.40						1.00	0.30	雨	10
3.05				0.50				0.15							1.30	0.30	晴	12
2.25			0.25									2.00	0.30				晴	13
2.45		0.30			0.15				0.40						1.20		晴	15
2.30											0.10			0.50	0.50	0.40	曇	16
2.35						0.15			0.40		0.30				1.10		晴	17
3.20										0.40					1.40	1.00	晴	18
2.55				0.40									1.00		1.15		曇	19
2.25								0.15	0.30				0.40		1.00		晴	20
3.05					0.15				0.40				0.20		1.50		曇後雨	22
3.15	0.40		0.40								0.20				1.35		雨	23
2.45						0.20					0.35				1.15	0.40	晴	24
3.10										0.30			0.40		1.20	0.40	晴	25
3.05		0.15		0.40			0.40								1.30		晴	26
0.30																0.30	曇雨	27
	0.40	0.22	0.33	0.43	0.13	0.18	0.38	0.17	0.34	0.34	0.27	2.00	0.32	0.40	1.15	0.38	平均	

出典：橋詰良一『家なき幼稚園の主張と実際』東洋図書、1928、pp.120-121をもとに筆者作成

書物や雑誌などを読んで… ……」と、子どもに聞かせるお話をすること以外に、子どもからもお話を聞き、「互いに話し合ひ聞き合つて」、「感情を交換」する保育を行うことが示されている。

「お遊びを共にする生活」では、「協同のお遊びをすることも大切な生活ですが、自由に選びあつたお友だちと自由なお遊びをさせることも大切なお遊びです。大切な幼児生活です。その生活に供するための遊具は何でも自由に使はせます。… (略) ……」と、みんなで共同遊戯と、自由に好きな友だちと好きな遊びをする自由遊戯の2つを基本とすることが示されている。

「廻遊にいそしむ生活」では、「廻遊とは、前にもいつた通り我が園の大切な保育項目で自然に親しむ事も、自然を観察することも、すべて此の項目を通じての企望 (原文ママ) として居るのであります。」と説明した後、「廻遊」の項目として、「石つみ、魚つり、水あそび、土ほり、草つみ、虫とり、鳥の聲を聞く」を挙げ、「擧げて行けば限りもないほど澤山な項目が抱擁されて居る」と、自然とのかかわりのなかで多くの遊びを経験する項目としている。さらに「石つみ」であれば、「川原や山地などでする自然創作で机の上の積木などに比すべきもの」、「魚つり」であれば「取りにやらせるもので、モンテッソリーの感覚修練などにも適したものと、それぞれの遊びがどのような目的をもつものであるかが説明されている。

「手技を習ふ生活」では、「折紙や、糸取や、板ならべや、切りぬきや、いろゝの手技を楽しませるのです。保姆としての教育をうけた女性でなければ通も出来ないと考えらるゝ點は此の項目に在るやうですが、私は左様にまで難かしいものとして眺めたくはありませんのです。」と橋詰は述べる。大正期には一般的に保育において取り扱われていた手技をこの保育項目の内容として示しつつ、それらを「難しいものとして眺めたくはない」と、保育者が様々な凝った手技創作の手本を見せ、子どもにまねをして作らせるという形が一般的に行われていた手技のあり方に一言を述べている。「家なき幼稚園」では、「自然恩物」と呼ばれる自然の草花や木々、粘土を使っての手技が行われていた。自然物を使うことの利点は、折紙や板などの一定の形を持つものではなく、季節により使われる葉や花、実、枝などが違う他、同じ種類でも色合い、状態が違う事や、手触り、匂いといった感覚を刺激する要素も含まれることであると言える。子どもは季節感を感じるとともに想像力が刺激され、それぞれがイメージしたものを作ることを楽しんだ。

「家庭めぐり」では「池田家なき幼稚園の幼児のお宅招待—園児のお宅から招待されて、其の日、其のところを幼稚園にして巡つて行きますことは各地とも家なき幼稚園の新しい特色として喜んで居るところですが、池田の父兄がたは特に之を喜んでくださまして御邸の廣い御宅や、山野に近い御宅からは絶えず御招待を頂きます。」と、招待された広い庭のある家を訪ね、その庭を借りて保育を行う活動が示されている。「家なき幼稚園」は、地域との関わりを密にもっており、地域の人々が参加できる行事なども行っていた。新しくできた郊外住宅に移り住んできた核家族が多かった地域では、前から住んでいる地域の人々と関わる機会を多く持つようにすることは、子どもとその保護者にとって、意味あるものであったと考える。

このように、「家なき幼稚園」では、6つの保育項目を基本としつつ、表2に見られるような幅広い保育内容を展開した。

3. 家なき幼稚園における保育者の育成

(1) 「家なき幼稚園」における「素人主義」

「家なき幼稚園」では、女学校を出たばかりの「若い娘」を保育者として採用し、幼稚園において育成する方法をとり、それを「素人主義」と名付けた。「家なき幼稚園」は開園当初、応募してきた中でも比較的年齢の若い、保育経験のある25~30歳の女性を2名採用した。しかし、橋詰が理想とする自然の中での保育には賛同してもらえなかった。2名の保育者は、莫塵を使うのを嫌がり、「アー、また莫塵ですか、これを見ると、ほんとに乞食幼稚園の感じがしますヨ。どうか早く畳椅子を造つていただきたいものですね…」¹¹⁾と、幼児の前でも平気で愚痴をこぼし、1年もたたずに辞めていったという。それに対し、のちほど採用された「若い娘」は、お弁当の際に、莫塵を家や山の形に敷いて子どもが楽しみながら食事がとれるように工夫した。子どもたちは、次第に自分たちでいろいろな形を作り楽しむようになり、自動車や機関車などを作った¹²⁾。

このエピソードからは、保育の知識や経験が少なくとも、莫塵を家や山の形に敷き、幼児がより楽しく生活ができる環境を作ろうとする保育者と、「乞食幼稚園」と愚痴をこぼし、幼児が自然を感じながら、その中でお弁当を食べることを楽しんでいることに気づかない保育者とは、大きな差があることが分かる。橋詰は、素人であるからこそ、固定観念にとらわれず、幼児のありのままの姿を受け入れ、幼児とともに楽しみながら生活を送ることができ、橋詰が理想とする保育を実践できる人材であると考えたと推察する。しかしながらそれは、保育者に専門的な知識や技術が不必要であるということではない。橋詰は、自身の著書において、「素人主義」について次のように述べている¹³⁾。

私は前にいつた通り單に純情を持つ娘と神性の輝ける幼児とを結び合はせておきさへすれば、おのづからのうちに自然の愛の發露となり、愛の道場の構成となり、又幼児保育といふ方面から見ても、様々な公案や創意が現前するものであると確信して居ますが、若き保姆の心の養ひ品性の修成といふやうなことに就いては、全然何等の考慮をも要しないとするのではありません。

寧ろ、大いに讀書し、大いに修養しなければならぬことを力説するものでありますが徒に難解の書物を机の上に置いて誇りとしたり、高尚な名の書籍をかゝへまはつて、却つて各自の謙徳を害ふやうなことのないやうと願つて参りました。

それで、僅かに四五種の書籍を選んで幼稚園の實典とし、常にこれを味讀するやうにと薦めて参りました。

その實典といふのは

- 一、自由教育論 (小原國芳著)
- 一、幼稚園の理論と實際 (森川正雄著)
- 一、兒童の生活と藝術 (島村民藏著)
- 一、新興藝術と新教育 (志垣 寛著)
- 一、子供の遊ばせ方 (阪内みつ子著)
- 一、母のための教育學 (小原國芳著)
- 一、我が子の教育 (西村伊作著)

右のやうなものでありますがフロエベルやペスタロツチの教育書は割合にその多くを各園の書架に藏して居ます。

・・・中略・・・

素人主義といふても、彼の卑しい高ぶりから逃れたいための方便であつて、決して無智のみを遵奉するものでないことを改めてこゝに言明しておきます。(下線は和田による)

橋詰はこのように、「大いに讀書し、大いに修養しなければならぬ」(下線)とし、保育者としての専門的な知識や技術を身につけられるようにした。その方法としては、①讀書の奨励、②他の幼稚園の参観、③保育者養成学校への(内地)留学、④「姉様学校」¹⁴⁾への加入、の4つの方法を採用した。①の讀書の奨励では、橋詰が園の実典とした7冊を中心に、幼児教育に関連する図書を読むことを薦め、保育に関する理論や知識を深めさせようとした。②では他の幼稚園に参観に行かせ、客観的に保育を見ることや、保育の方法を知る機会を作った。③では、プロジェクト・メソッドを導入したと言われる森川正雄(1873-1946)が主事を務めた、奈良女子高等師範学校保姆科に選抜した保育者を通わせ、「家なき幼稚園」で中心となる保育者を育成した。その他の保育者には、免許を取得するための講習会へ通わせるようにした。④の「姉様学校」では、保育に関する講習会や保育者、母親参加の親睦会を行うほか、機関誌『愛と美』を発行し、そこに保育の実践記録を掲載するなど、保育者が主体的に自身の保育を見つめ、省察していく機会をもうけた。「姉様学校」は、保育者が中心となって活動しており、『愛と美』の編纂にも保育者が携わっていた。この活動を通して、保育者は責任感や協同性、文章を書く力などが養われていったと考える。

このようにして、「家なき幼稚園」では「家なき幼稚園」独自の保育を実践できる保育者を育成していった。1933(昭和8)年には、「大阪自然保姆学校」¹⁵⁾という認可の保育者養成機関を設立するに至っている。

(2) 讀書を通しての保育者の学びと実践

橋詰は、保育者の学びに対して、次のように述べている¹⁶⁾。

私は保姆たるべき若き女性の獨自修養に大きな信頼を持つものですが、先輩の教導なしには到底爲されるものでないかと感ぜられる程の「手技」でも、一旦幼児の愛に目ざめた若い女性たちが、其の可愛さにそゝのかされて、一生懸命になる結果は、いつもとなしに覺へて仕舞つて、二年たゝぬ間には立派な先生の手際を發揮します。

それにはまた相當な教授書もあるので、あまり多くの不自由もないやうですが、樂器の奏法等でも随分眼に立つた熟達ぶりを示すのに驚かされます。(下線は和田による)

このように、橋詰が驚きを示すほど、「家なき幼稚園」の保育者は熱心に保育技術の向上を図っていたことが把握できる。また、「相當な教授書もある」(下線)という言葉から、保育技術を学ぶための教授書が整えられていたことも把握できる。「家なき幼稚園」の保育者が中心となって編纂している「姉様学校」の機関誌『愛と美』には、多くの保育や教育に関する雑誌の紹介が掲載されており、雑誌を寄贈し合うことも行われていた。保育者は、当時の先端の教育や文化等を学ぶ雑誌や著書を手にする機会が多くあったのではない

かと推察する。

次に示すのは、橋詰が開設した「家なき幼稚園」の1つである、「大阪家なき幼稚園」に勤める保育者の、子どもへの言葉がけについての記録¹⁷⁾である。

◇言葉使ひに就いて 秋子(大阪)

子供には否定の言葉を與へない様にそつちへ行つてはいけません、といふ代わりに、こつちへいらつしやい、といふ様にせよと何かの本で讀んだことがある。その後私は何時も氣をつけて物を言ふ様にしてゐる。積木をしてはいけませんといふ代わりに、積木はやめてかくれんぼをさせよう、といふ様に。

子供には、何をしてはいけませんと云ふより、外の何かをさせよう云つた方がずつとおだやかでもあり、気持ちを伸ばす上に効果がある。而し急いでゐる場合にはいつもその心掛を忘れてしまふ。特に電車の乗り降りなどの場合飛び降りてはいけません、窓から顔を出してはいけません、手を出してはいけません、等、自分の氣があせればあせる程、いけませんを連發してしまふ。叱るつもりではない注意するためのいけませんを云つてつもりでも子供にはお叱言に聞えるとみえて、びつくりして云ふ事を聞く。氣をつけて前へ出てはいけません、といふ代わりに後へ寄りませう、と云つた時には、甘へて何度云つても云ふ事を聞かない事が多い。こうした時には、やつぱりいましめる意味に於て、いけませんを使つた方がいい、かもしれない。その瞬間だけづゝ(原文ママ)子供を、ちゝませる様な、氣がするけれど。(下線は和田による)

この記録からは、「何かの本で讀んだことがある」(下線)と保育者が言うように、讀書を通して得た知識をもとに、保育の実践の中で、子どもに対する言葉がけの仕方を試行錯誤している姿が見て取れる。「大阪家なき幼稚園」は大阪の街なかの子どもたちを毎日電車に乗せて、郊外の自然の中まで連れて出て保育をおこなっていた。日ごろ氣をつけて使わないようにしている否定の言葉が、子どもを連れて電車に乗るといふ緊張した状況の中で、度々出てしまうことに反省を見せながらも、子どもの安全のためには必要であるのではと悩む姿が見られる。

このように、讀書を通して得た知識を実践の中で生かしていこうとする姿が記録としてあることから、「家なき幼稚園」の保育者が自分に必要な保育の知識や技術を修得する方法の1つとして、保育、教育に関する著書を活用していたことがうかがえる。

4. 坂内ミツの『子供の遊ばせ方』に学ぶ

(1) 橋詰が推薦した7冊の著書

橋詰が幼稚園の実典とした前述の7冊(『自由教育論』、『幼稚園の理論及實際』、『児童の生活と芸術』、『新興芸術と新教育』、『子供の遊ばせ方』、『母のための教育学』、『我が子の教育』)¹⁸⁾に着目する。『自由教育論』(小原國芳)、『母のための教育学』(小原國芳)、『幼稚園の理論及實際』(森川正雄)の3冊は、教育および幼児教育の基本的な理論が示されている。橋詰は特に、プロジェクト・メソッドを取り入れた保育を実践したと言われる森川正雄の教育方法に賛同していたようで、森川が主事を務めた奈良女子高等師範学校附属

幼稚園に「家なき幼稚園」の保育者を頻りに観察に行かせたほか、森川が携わった奈良女子高等師範学校保母科に保育者を入学させている。森川の『幼稚園の理論及実際』は、奈良女子高等師範学校保母科の教科書として使用されており、幼児教育の歴史、幼児教育法、保育案、幼稚園令・幼稚園令施行規則などを網羅する内容となっている。のちに、「大阪自然保母学校」での教科書としても採用されている。これらのことから、橋詰が典拠とした7冊の著書の中でも、幼児教育の原理を学ぶ著書として活用されていたことが推察できる。

『新興芸術と新教育』（志垣寛）は芸術と文学について、『児童の生活と芸術』（島村民藏）は、芸術と教育についてそれぞれ書かれており、1918（大正7）年から1928（昭和3）年にかけて展開された芸術教育運動の影響を橋詰が強く受けていたことが分かる¹⁹⁾。

『子供の遊ばせ方』（坂内ミツ）は、橋詰が選んだ著書中で、唯一の女性の保育実践者であった坂内ミツの著書である。本書は、坂内の保育実践に基づく子どもの遊びの詳細と指導のあり方が示されている。また、他の著書よりも平易な文章で書いてあり読みやすい。「家なき幼稚園」の保育者にとって、実践に基づく具体的な遊びについての方策が参考になったと推察できる。

『我が子の教育』（西村伊作）は、親として、特に母親の子どもへの教育について書かれたものである。子どもを産む心構えや、子どもの育て方、子どもの生活について幅広く論じられている。

これら7冊の中でも本論では、坂内ミツの『子供の遊ばせ方』に着目する。「家なき幼稚園」では、前述した6つの保育項目を中心に、様々な遊びが展開された。坂内の『子供の遊ばせ方』は、保育者の子どもに対する視点や、遊びの指導における具体的な方法を学ぶにあたり大いに参考になったと推察できる。そこで、坂内ミツの『子供の遊ばせ方』から、「家なき幼稚園」の保育者がどのような保育方法を学んでいたかについて考察する。

(2) 坂内ミツ著『子供の遊ばせ方』の内容

坂内ミツは、1912（大正元）年から1924（大正13）年まで、東京女子高等師範学校附属幼稚園（以下、附属幼稚園と記す）に保育者として勤め、1924年1月に『子供の遊ばせ方』（教文書院、1924年2月10日発行）を上梓した後に退職している²⁰⁾。坂内は、「はしがき」において、「子供を育てるといふ事は人のなすべき事の中で最も貴く且つ最も至難な事」だとし、「處が一般に子供を育てる事は婦人の當然の務として貴ばれもせず顧られもしない傾向があります。殊に子供の生活の大部分である遊ぶといふ事に注意されないのは不思議な事であります。私は多くの方に子供の事について注意していたゞき度いと存じまして不完全ながら本書を書いた次第であります。」²¹⁾と、この書を出すにあたっての目的を述べている。本書は、坂内の附属幼稚園勤務での保育者としての経験をもとに、子どもの遊びとその導き方について多くの人に伝えたいという思いのもと書かれている。

『子供の遊ばせ方』は、目次に沿って見ると、遊びの基本について述べたあと、遊びの内容について、「室内での遊び」、「室外での遊び」の2項目に分類し、それぞれの具体的な遊びの内容を示している。表3は、目次をもとに目次として示された項目を取り上げて作成したものである。

表3 『子供の遊ばせ方』の目次（頁は省略）

子供を遊ばせるという意義
子供を遊ばせるに大切なる条件
子供の好む遊びの種類
子供を遊ばせる遊びの種類と其方法
室内の遊び
團體の遊び方
お話の仕方、人形の遊び方、ものづくしの遊び方、双六・カルタの遊び方、椅子取り（輪拾い）の遊び方、探しもの・遊び方、雷おとしの遊び方、郵便の遊び方、汽車の遊び方、デパートメントストアの遊び方、動物園の遊び方、展覽會の遊び方、あてもものの遊び方、飛んだゞの遊び方、ジャンケンの遊び方
個人の遊び方
お話の仕方、繪雑誌の教え方、たゞみ紙の仕方、織紙の仕方、きり紙の仕方、人形づくりの遊び方、積木の遊び方、自由書の数え方、粘土製作の教え方、つなぎもの・遊び方、大工さんの遊び方、厚紙細工の仕方、凧貼りの仕方、廢物利用の遊び方、
室外の遊び方
自然に親しましめる爲め、相互生活をさせ身體を強壯ならしむる爲め、友達と遊ばせよ、園庭を開放せよ、相當に設備せよ、菜園及花壇の作り方、砂場の作り方、ブランコの作り方、遊動圓木の作り方、其他遊具の選び方、動物飼育の教え方、子供の好む外遊びの種類
結論

出典：坂内みつ『子供の遊ばせ方』教文書院、1924年pp.1-5をもとに筆者作成

最初に示された「子供を遊ばせるという意義」²²⁾では、「子供は遊ぶのが本體であり仕事であります」に始まり、子供を遊ばせるという事について、「一つには直接遊ばせてやる事と、一つには子供自身を遊び得るやうな境遇に置いてやるということになります。子供はこの二つの中で、何れを好むかと言いますと、遊ばせて貰うよりは、自發的に自分で遊ぶという事を好むものであります。又、大人に遊ばせて貰ふよりは、子供同士で遊ぶことを好むものであります。」と、平易な言葉を用いながら述べていく。ここでは、子どもが自發的に遊ぶことや子ども同士で遊ぶことを好むことが述べられている。

次の、「子供を遊ばせるに大切なる条件」²³⁾では、「前述の意味から子供を遊ばせる大人の心持を二つに分けて考へねばなりません」とし、次の内容を示す。

- 【一】 子供の遊び相手となるには
 - (イ) 誠意をもつて本気に遊んでやること。
 - (ロ) 遊びの方法を多く知つて居ること。
- 【二】 子供同志自發的に遊び得るやうな境遇においてやるには
 - (イ) 自發的に遊び得る場所を與ふること。
 - (ロ) 其材料を提供してやること。

そして、「幼児は敏感で直感することが速いから、相手の心を看破することが早いのであります。遊び相手になつてゐるやうに見えても、心の内で何か考へ事をして居る様では、子供はすぐにその心

中を看破して少しも興味を感じません。従つて遊びも長くつゞきません。」「大人が本氣になつて、子供の爲を思つて、遊ばせると、何ひとつ玩具がなくとも、面白く遊ばせることが出来るのであります。」「- (略) - 誠意- ということが、一番大事な條件であります。」「幼稚園の先生が、初対面の子供と親密になり、心と心の觸れ合ふことの出来るのは、全くこの心の一つであります。」と、保育者の心のもちかたを説く。そして遊び場は、子どもが「心ゆくだけ遊ぶ」ことが出来る場で、安全であることも示す。

この「子どもを遊ばせるに大切な条件」に示された内容は、「家なき幼稚園」の保育において橋詰が大切にしたい視点と共通する。また、坂内の保育や子育てにおける大人の心のもちかたに関する発言は、他の頁においても見られるが、坂内が東京女子高等師範学校附属幼稚園に勤務していた際、倉橋惣三 (1882-1955) が主事をしていた時期があり²⁴⁾、倉橋とともに子どもに真摯に向き合ってきたことが想像できる。

3つ目の「子供の好む遊びの種類」²⁵⁾ では、子どもの好む遊びについて、「その年齢や性質に依り、又は土地の風習、季節などに依つて違ふ」としながらも、共通点としては、「精一つばいに心身を活動させること」であるとし、凧あげやかかけこなどを具体例として挙げる²⁶⁾。さらには、「子供は、束縛されることを嫌い、自由に考へ自由にはね廻りたい」ものであるとし、「殺風景と見える廣々とした運動場が子供に歓迎せられるのは、この意味でありまして」と、整えられた子供部屋や庭で遠慮して遊ぶよりも、何もなくとも遠慮なく遊べる広々とした空間で思いきり遊ぶ方を好み、その遊びは、絵を描く場合、「一枚ですよとか三十分でよせと言われては面白くない」と絵を描く紙の枚数や、遊び時間を制限されては、子どもは楽しい気持ちにはならないと、子どもの発達の特性を示す²⁶⁾。そして、「積木」などの数が少なく思い切り遊べない場合の、材料の不足から来る弊害について注意を促すとともに、「さればと言つて、たゞ徒に材料を豊富にし数多い玩具を興へるといふことも、亦考へ物」であると述べ、材料の量における妙味を説く。そして、次のように、遊びの本質を説明するのである。

子供は活動そのものが目的で、他に目的を持たない場合が多いのであります。初めから設計して汽車とか電車とかを造つて走らす場合もないではありませんが、出来上つたものが目的でなく造ることが面白いのであります。

所で造つたおだんごは、忽ちにこはれるし、初めから食べるつもりはないのでありますがおだんごを造ること、饅頭の形を造ること、それが面白くてたまらぬのであります。

たゞみ紙のやうに結果の明らかなものでさへも、出来上つたものを喜ぶよりは、たゞんで居るその間の方が興味が深いのでありまして、其處は大人の思ひ及ばない處であります。

或子供が小さなシャベルでバケツに砂を入れて居る、なかへ一杯にならぬので、乳母は早く目的を達してやつたら喜ぶものと思つて、バケツに一杯入れてやつた處、子供は怒り出して、そのバケツの砂をひつくりかえして、又自分で入れはじめたといふ話は有名なものであります、がこれに類した例はいくらもあります。

子供はバケツに砂を入れて、一つばいにするのが目的ではな

く、入れるその活動がしたいのであります。それを心なき大人は、剛情が始まった、人が親切に入れてやるのに意地の悪いく(原文ママ)と叱ることが多い様ですが、冷静にその原因を考へて見ますと、子供に罪はないのであります。

剛情だゞと大人が剛情にしていまふから子供も剛情を自覚してしまひ、それが性質となつてしまふ場合が多いのであります。

ここでは、遊びは活動(遊び)そのものが目的であるという遊びの本質を具体例を挙げながら説明するとともに、大人の誤解による決めつけが、子どもの性格を方向づけてしまう危険性も示唆している。さらには、片付けについて次のように分析する。

まゞごとをしても、積木を積んでも、後を片付けず、打捨て、置くことは、悪い習慣をつけるには相違ありませんが、その原因を考へて見ますと、怒すべきものがあります。

子供は精一つばいに遊ぶ積木など二籠も三籠もある積木を出して、博覧會を造るとか、動物園を造るとか、遊びつゞけ興じつゞけて一時間餘もつゞけば、精力が盡きて疲勞を感じそれがかたづける勇氣がなくなつてしまひ、そのまゞ打ち捨て、置くやうになりますけれどもその疲勞は積木に対する疲勞であつて、外の事に移れば元気が再び出て遊び得るものであります。大方の人はそれを見ると疲れて居るとは思われなくて、我儘のために、かたづけけないのだと早合點して小言を云ふ様になるのであります。其の點は、大人がよほど、同情の眼で見てやらねばならぬ處であります。

子供の注意や興味は、移り易く、あれこれと移つて行くものではありますけれども、又一方では同じことをくりかへす事を好むものであります。

語にしても、同じ話を幾度くりかへしても飽きませぬ。

(以下略) …。

坂内は、このように、子どもの発達の特性に着目しながら、子ども理解の視点を積木などの事例を挙げながら具体的に述べていく。経験の浅い「家なき幼稚園」の保育者は、この著書から、子どもをどのように捉え、子どもの発達や遊びを見ていくのかという保育の基本的な視座を学んでいくことができたと推察する。

続く、「子供の好む玩具」²⁷⁾ においては、「豊富に玩具を興へ、遊びの材料を豊富にしてやることは大切なことであります。玩具は必ずしも精巧なものを好むということはありません」とし、高価なものよりも、「思ふ通りに製作し得るもの」、「思ふ通りに種々のものに流用し得るもの」を好むと述べ、その例として、「一枚の葉は、皿にもなれば茶碗にもなり、時には鍋にもなり釜にもなりお櫃にもなります、その葉を、茶碗にしようお釜にしよう工夫する處に興味を感じる」のだと述べる。そして、形の整つたままごと道具を用いるにはそれに対する作法を守る必要が生じるが、「木の葉や瓦のかげらを茶碗とし、お櫃とした時には、子供の強い想像力は、之を全く眞のお茶碗と思ひ、眞のお櫃と想像してゐるのでありますから、手でつけることは、おしゃもぢを持つたものと想像して居るのであります。手で食べてもお櫃を持つて居ると想像して居るので

ありますから、少しも不思議がないのであります。」と、子どもが想像の世界を膨らませ、思う通りに流用することができる自由度の高い玩具の有用性を示す。さらには、「高価なゼンマイ仕掛けの自動車」と「たゞ一つの煉瓦大の積木」を対比させて次のように説明する。

ゼンマイ仕掛けの自動車を好まないものはありません。されどすぐにこはれ易いので、一寸でもこはれかゝれば、幼児の破壊性と好奇心とは混同して、早速こはして見ます。そのこはれたものは元にはかへらないので、こはしたのかと云われると、可愛いと思つて居た自動車も憎らしくなつてしまいます。

これに反して、たゞ一つの煉瓦大の積木を汽車にして遊ぶ子供は、一日中押して歩いてもこはれる心配はありません。砂場でもあれば、其處に山を築いて、トンネルをつくつてくぐらせたり、停車場をこしらへたりすれば変化もあつて興味はなかゝ尽きず、何時までも遊びがつけられます。

明日も、明後日も、積木の汽車を變りなく遊ばせてくれます。好きな兒になると、幼稚園などでは、幾日もゝ、つゞけて、たゞ一つの積木で遊び通して居る人を見うけます。積木でなくとも、一寸した木片であれば、利用の道は多いのであります。

五圓も十圓もするやうな高価な玩具を山ほど買ひあつめて、材料が豊富であると誤解してはなりません。高価なものでも、子供にとっては、貧弱なものとしか思はず、安価なものでも豊富に考へることもありますから、十圓の汽車よりも一銭の子供切符と、切符切りの方がどんなに喜ばれるか。幾十圓もする人形より、着せ換えが出来、顔も洗つてやられる安いものゝ方が貴ばれるものであります。これ等は利用する機会が多いからであります。

・・・(中略)・・・

路傍に咲いて居る草花は、まゝごと遊びの御飯にもなれば、御かずにもなり、お肴にもなり又かんざしにもなればお土産にもなるのでありまして、これ等の玩具は、何處如何なる處でも、容易に得られるものであります。

自然界には玩具が無限なくころげて居て、利用してほしいと待つて居るのでありますから、出来るだけこれをよき方法に利用したがよいと思ふのであります。

坂内は真に子どもの遊びに必要な玩具が、高価な、真新しく珍しい玩具ではなく、子どもの想像力をかきたてる自由度の高い玩具であるとし、その理由を具体的に説明する。また、自然にあるものは変化に富み、いろいろな玩具になるため、自然にあるものを出来るだけ利用することがよいと思つていることも述べる。「家なき幼稚園」の保育は前述したとおり、建物を使わない自然の中での保育が展開されたため、集合場所に集まった後、保育者と幼児は、ござ、組み立て机、折りたたみ式の椅子、乳母車に取り付けたオルガンなどの用具を持ち運び、付近の森や川や野原に出かけて活動した。そこには、整ったままごと道具も、ゼンマイ仕掛けの自動車も無い。子どもたちは自然の中で草花を摘み、石を積み上げ、自然の粘土でいろいろな物を作った。「家なき幼稚園」の保育者の学びに必要な指導書は、人工的な高価な玩具、整えられた数ある玩具の使い方

はなく、自然の中で見つけられる玩具、容易に持ち運びができ自由度の高い玩具の扱い方や遊び方が示されたものであった。そして、子どもに真摯に向き合いながら手探りで保育を進める若い「家なき幼稚園」の保育者にとって、玩具の扱い方や遊び方が示されるだけでなく、遊びのどの部分に子どもが興味を示すのか、どのような準備が必要であるか、遊ぶ時にはどのような配慮が必要であるかという、保育実践の積み重ねから導き出された具体的な方策と子どもへの視点が丁寧に書かれている坂内の著書は、大いに参考になるものであったと推察する。

『子供の遊ばせ方』では、「子供の好む玩具」の続きには、「玩具の選定の基準」が示され、次に、お話し、人形遊び…と一つひとつの遊びについて具体的な方策が示された。特に、お話しの仕方や、自然のものを使ったさまざまな遊び方に関する具体例は、「家なき幼稚園」の保育者には参考となったと考える。

(3) 『子供の遊ばせ方』の世の中への広がり

このような具体的な遊びの指導内容を記した『子供の遊ばせ方』は、刊行にあたり、雑誌『幼児の教育』において大きく宣伝された。最初に、近刊のお知らせとして、雑誌『幼児の教育』第23巻第7号²⁸⁾の裏表紙の内側1ページを使い、広告が掲載された。この広告には、「子供を遊ばせることは中々難しいが又愉快なものである。幼児教育の理論と實際に精通した著者の、子供に對する遊ばせ方の研究書であります。學校でも家庭でも備ふべき良書として御勧めします。」という宣伝文句がみられる。次号以降にも広告は掲載され、第23巻第12号の『幼児の教育』では、多くの予約が入っていることがうかがえる。第24巻4月号²⁹⁾には、第23巻第7号に掲載された広告記事の、「近刊」と書かれていた部分が「高評第五版」と書き換えられた広告が掲載されている。その後の5月号、6月号、7月号、8月・9月合併号、10月号まで広告は掲載され続けており、6月号では、「訂正第八版出来」という記載が見られ、紹介文には、「今日賣行きの持続するのは内容の良い結果と信じます。」との一文が見られ、多くの人の手に渡っていたことが把握できる。坂内や倉橋が関係する幼稚園や、保育者の養成学校、教育関係者、『幼児の教育』を購読している人々が、主に手にとつたと推察できる。

その後、1929年に、教文書院から、内容を一部加筆、修正したものが出版された³⁰⁾。目次において新に「年中行事の遊び方—三月節句、五月節句、七夕、お月見、まゆだまつくり、お正月用意」が加わったほか、既存の項目の内容にも加筆、修正が見られる。その後、『子供の遊ばせ方』は、1933年から1934年にかけて文部省社会局が編成、出版した、『文部省推薦図書時報、第3輯』³¹⁾に選出された。同書における『子供の遊ばせ方』の紹介文では、著者である坂内の経歴と著書の概要を説明した後、次のように締めくくっている。

何れも著者の實際指導の経験から述べられて居るので、瑣細の事物の利用法、子供に對する言葉の使ひ方に至るまで、水も漏さぬ注意の周到さが随所に溢れてゐる。

著者は終始子供を育てることの困難さと貴さを高調し、如何なる複雑な大事業も子供を育てるといふ貴い仕事に及ばないといふ熱烈なる愛の自覺に立ち、遊びは子供の生活の全部である

となして、この指導に一層の注意の拂われん事を切望しつゝ、本書を著はされたものである。

大要左の如く本書は著者の體驗の記録であり、直ちに子供の遊びの指導に役立つものである。その叙述の方法も子供の實際の動きを織り込んで居るから乾燥無味に陥らず、文章も平明であるから何人にも容易に理解されると思ふ。(下線は和田による)

このように、坂内の経験からくる子どもの遊びに関する理解の深さや、子どもへの細やかな配慮が行き届いた指導のあり方に対し、「水も漏さぬ注意の周到さが随所に溢れている」(下線)という表現により、評価していることがうかがえる。同書は、1935年には厚生閣書店からも発行されており、³²⁾子どもの遊びに関する指南書として、多くの子どもにかかわる人に読まれたと推察できる。

5. おわりに

本研究において、「家なき幼稚園」の保育者たちが、読書から保育の原理や方法、保育内容に関する具体的な指導方法を学んでいたことが把握できた。その中でも、特に子どもの発達を踏まえた上での、遊びにおける具体的な指導方法や、子どもへの眼差しについて学ぶにあたり参考となったのが、坂内ミツの『子供の遊ばせ方』であったことが把握できた。その著書は、坂内が、大正期に東京女子師範学校附属幼稚園での実践を通して得た知識と技術に基づいた子どもの遊びに関する指南書であった。坂内の遊びに対するとらえ方は、橋詰が理想とした、子どもの興味・関心に基づき、幼児と保育者が相互に関係し合い、共に生活を営んでいくという視点と共通するものがあり、「家なき幼稚園」の保育者たちにとって、学ぶものが大いにあったのではないかと推察できる。7つの園を運営していた橋詰にとって、保育者一人ひとりに、橋詰の保育観を伝える上でも、役立つものであったと考える。

書籍は、作者の経験に基づく知識や技術、長年の研究から導き出された理論など、読者の知らない情報を短時間で得ることができる。その情報が自身の知識を深めたり、物事を考えるきっかけとなったり、これまでとは違った見方があることを知ったりする。近年、若者の読書離れを良く耳にするが、保育者の養成や研修における読書のあり方を今一度見直す必要があるのではないだろうか。

今後の研究としては、坂内ミツの『子供の遊ばせ方』における各遊びの内容、特にお話や自然物の活用に目を向け、検討したい。

脚注

1) 例えば、日本保育学会著『日本幼児教育史』第3巻(フレーベル館、1969年、pp.132-134)では、大正期の園外保育を紹介する中で、園外保育の特殊な形態として、「家なき幼稚園」の意欲的な試みを紹介している。また、「家なき幼稚園」が設立された当時、倉橋惣三や、志垣寛、小原國芳など当時の教育者らによっても「家なき幼稚園」の取り組みが高く評価され、雑誌や著書で紹介された。(倉橋惣三「『家なき幼稚園』を訪ふ」『幼児の教育』第24巻4月号、1924年。志垣寛「家なき幼稚園を勤る」『教育の世紀』第2巻4月号、1924年。小原國芳「一、家なき幼稚園」『日本の新学校』玉川学園出版部、1930年。)

2) 橋詰良一は、1871年10月19日に兵庫県尼崎市に生まれ、1895年3月に神戸師範学校を卒業する。小学校の訓導を務めたのち、1906年11月より大阪毎日新聞社に入社し、国内通信部員として教育担当の記者となる。1920年6月に初代事業部長に就任する。橋詰は「家なき幼稚園」を大阪毎日新聞社の常設事業として始めようとするが叶わず、個人の事業として始めた。

3) 「家なき幼稚園」が開園から4年足らずで7園にまで広がった背景には、当時、箕面有馬電気鉄道(阪急電鉄株式会社の前身)の専務取締役であった小林一三との関係がある。福元真由美は、「家なき幼稚園における教育-郊外住宅地における保育空間の構想」(『ジェンダーと教育』教育学年報7、世織書房、1999年)において、「橋詰が、私鉄企業の郊外住宅地開発と新聞社の事業活動との結節点に、家なき幼稚園を成立させた」(p.474)と、「家なき幼稚園」が短期間で増えた経緯を明らかにしている。

4) 上笙一郎・山崎朋子『日本の幼稚園』理論社、1965年。山村貞雄「大正期の園外保育の姿」『日本幼児保育史』第3巻、フレーベル館、1969年、pp.125-135。宍戸健夫「橋詰良一-大自然の中での「家なき幼稚園」の創設」岡田正章・宍戸健夫他篇『保育に生きた人々』風媒社版、1971年、pp.267-280。宍戸健夫『保育の森 子育ての歴史を訪ねて』あゆみ出版、1994年。森上史朗『児童中心主義の保育』教育出版社、1991年。山崎千恵子『橋詰せみ郎エッセイ集』関西児童文化史研究会、1990年。福元真由美「家なき幼稚園における教育-郊外住宅地における保育空間の構想」(『ジェンダーと教育』教育学年報7、世織書房、1999年、pp.473-496。橋川喜美代『保育形態の変遷』春風社、2003年。和田真由美「『家なき幼稚園』における季節環境を生かした生活と保育-保育実践の記録から-」『近大姫路大学教育学部紀要』第4号、2011年、pp.105-113。米津美香「橋詰良一の『家なき幼稚園』構想-幼児期における自然との関わりに関する一考察」『保育の実践と研究』第19巻第2号、2014年、pp.56-67。

5) 富田好久「家なき幼稚園の保育史上の意義(上)」大阪青山短期大学紀要第13号、1987年。富田好久「家なき幼稚園の保育史上の意義(下)」大阪青山短期大学紀要第14号、1988年。富田好久「橋詰良一の生涯とその社会事業」大阪青山短期大学紀要第15号、1989年。津金澤聰廣『近代日本のメディアイベント』同文館、1996年。津金澤聰廣「『家なき幼稚園』が時代を越えて現代の私たちに語りかけるもの」『広報』第5号、日本広報協会。

6) 橋詰は、「若い素人の娘」を保育者として採用することを、「素人主義」と呼んでいた。

7) 和田真由美「『家なき幼稚園』の保育者養成への取り組み-大正期における保育者養成機関の実態を背景として-」『幼年教育研究』第19号、兵庫教育大学幼年教育コース、2007年、pp.81-90。

8) 坂内みつの『子供の遊ばせ方』は、論者が確認した範囲において、①1924年に教文書院から出版されたもの、②1929年に加筆修正を行い、教文書院から出版されたもの、③1933年に②と同じ内容で吉岡書房から出版されたもの、④1935年に②と同じ内容で厚生閣書店から出版されたものがある(1978年出版の『大正・昭和保育文献集』を除く)。本研究では、橋詰が保育者に薦めた1924年度版のものを使用する。また、坂内の氏名は媒体により、

「坂内ミツ」, 「坂内みつ」, 「坂内みつ子」, 「坂内ミツ子」などの表記が見られる。本稿では, 「坂内ミツ」で統一する。

- 9) 橋詰良一『家なき幼稚園の主張と実際』東洋図書株式会社, 1928年, p. 118
- 10) 橋詰良一, 前掲書, pp.151-155
- 11) 橋詰良一, 前掲書, pp.302-303
- 12) みよ子「莫塵の機関車」『愛と美』第3巻7月号, 姉様学校, pp.42-43
- 13) 橋詰良一, 前掲書, pp.76-78
- 14) 橋詰は, フレーベル (F.Fröbel 1782-1852) がカイルハウに建てた『母親学校』を参考に, 保育者や母親が参加し, 保育や子育てを学ぶ会を設立し, 「姉様学校」と名付けた。
- 15) 「大阪自然保姆学校」では, 午前中は幼稚園で保育の実施見学を行い, 午後から1日1科目学科を学んでいた。カリキュラムの詳細については, 拙稿「『家なき幼稚園』の保育者養成への取り組み—大正期における保育者養成機関の実態を背景として—」(『幼年児童教育研究』第19号, 兵庫教育大学幼年教育コース, 2007年, pp.81-90) に詳しい。
- 16) 橋詰良一, 前掲書, pp.83-84
- 17) 橋詰良一, 前掲書, pp.84-85
- 18) 小原國芳『自由教育論』イデア書院, 1923年。森川正雄『幼稚園の理論及実際』東洋図書, 1924年。島村民藏『児童の生活と藝術』高陽社, 1924年。志垣寛『振興芸術と新教育』教育の世紀社, 1924年。坂内みつ『子供の遊ばせ方』教文書院, 1924年。小原國芳『母のための教育学』イデア書院, 1923年。西村伊作『我子の教育』文化生活研究会, 1923年。橋詰の著書では森川の著書は『幼稚園の理論と実際』と「及」ではなく「と」と記されている。
- 19) 橋詰が, 児童芸術運動の影響を強く受けていたことは, この2冊を実典とした以外にも, 橋詰が児童芸術運動に関わっていた多くの人物と関わりを持っていたことや, 『愛と美』誌に北原白秋や野口雨情らの作品が見られるほか, 「児童芸術号」と題した特集号が作成されるに加え, 橋詰の「『児童芸術』に触れようとする人々へ」と題する論考がみられることから推測できる。
- 20) 坂内ミツに関する先行研究には, 向山陽子「『社会的な遊び』概念についての考察—保姆坂内ミツの子どもの遊びへの視点—(1924~1937)」『淑徳大学短期大学部研究紀要第58号』淑徳大学短期大学部, 2018年がある。向山は, 坂内の「社会的な遊び」の概念形成の過程を辿り, 「社会的な遊び」が意味する内容について論じている。
- 21) 坂内ミツ, 前掲書, p.1 (はしがき)
- 22) 坂内ミツ, 前掲書, pp.1-3
- 23) 坂内ミツ, 前掲書, pp.11-17
- 24) 向山は, 前掲の論文において, 坂内が倉橋と共に働いていた期間について, 「倉橋の留学期間を挟んで4年5ヵ月間」であったとしている。
- 25) 坂内ミツ, 前掲書, pp.17-21
- 26) 坂内は, 凧あげは「精いっぱい大きい凧を高く掲げたい」かけっこは「力のあるだけ出して馳(原文ママ) けたい」と, 子どもは全力で遊ぼうとすることを例を挙げて示している。

- 27) 坂内ミツ, 前掲書, pp.17-21
- 28) 倉橋惣三編『幼児の教育』第23巻第7号, 教文書院, 1923年
- 29) 倉橋惣三編『幼児の教育』第24巻4月号, 教文書院, 1924年
- 30) 坂内ミツ『子供の遊ばせ方』吉岡出版, 1929年
- 31) 文部省社会教育局編『文部省推薦図書時報, 第3輯』, 1933-34年, pp.11-12
- 32) 坂内ミツ『子供の遊ばせ方』厚生閣書店, 1935年

引用・参考文献

1. 姉様学校『愛と美』第1巻—第8巻, 姉様学校, 1927年—1934年
2. 岡田正章・宍戸健夫他篇『保育に生きた人々』風媒社版, 1971年
3. 小原國芳『自由教育論』イデア書院, 1923年
4. 小原國芳『母のための教育学』イデア書院, 1923年
5. 倉橋惣三編『幼児の教育』第23巻第7号・第24巻4月~10月号, 教文書院, 1923年・1924年
6. 坂内ミツ『子供の遊ばせ方』教文書院, 1924年
7. 志垣寛『振興芸術と新教育』教育の世紀社, 1924年
8. 宍戸健夫『保育の森 子育ての歴史を訪ねて』あゆみ出版, 1991年
9. 島村民藏『児童の生活と藝術』高陽社, 1924年
10. 橋川喜美代『保育形態の変遷』春風社, 2003年
11. 橋詰良一『家なき幼稚園の主張と実際』東洋図書株式会社, 1928年
12. 西村伊作『我子の教育』文化生活研究会, 1923年
13. 日本保育学会『日本幼児保育史』第3巻フレーベル館, 1969年
14. 福元真由美「家なき幼稚園における教育—郊外住宅地における保育空間の構想」『ジェンダーと教育』教育学年報7, 世織書房, 1999年, pp.473-496
15. 森上史郎『児童中心主義の保育』教育出版社, 1991年
16. 森川正雄『幼稚園の理論及実際』東洋図書株式会社, 1924年
17. 向山陽子「『社会的な遊び』概念についての考察—保姆坂内ミツの子どもの遊びへの視点—(1924~1937年)」『淑徳大学短期大学部研究紀要第58号』淑徳大学短期大学部, 2018年, pp.83-95
18. 文部省社会教育局編『文部省推薦図書時報, 第3輯』, 文部省社会教育局, 1933-34年
19. 和田真由美「『家なき幼稚園』における季節環境を生かした生活と保育—保育実践の記録から—」『近大姫路大学教育学部紀要』第4号, 2011年, pp.105-113
20. 和田真由美「『家なき幼稚園』の保育者養成への取り組み—大正期における保育者養成機関の実態を背景として—」『幼年教育研究』第19号, 兵庫教育大学幼年教育コース, 2007年, pp.81-90